

平成 22 年 6 月 3 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19520413
 研究課題名 (和文) 複合名詞と複合形容詞の意味研究の精密化を目指して
 研究課題名 (英文) Toward the Refinement of Semantic Studies of Compound Nouns and Compound Adjectives
 研究代表者
 竝木 崇康 (NAMIKI TAKAYASU)
 茨城大学・教育学部・教授
 研究者番号： 90106740

研究成果の概要 (和文)：日英語における複合名詞と複合形容詞の意味研究の精密化を目指し、次のことをした。(1) ある種の「意味の稀薄化」が起きている複合語について「特質構造」の概念を用いて意味解釈の仕方の方向性を示した。(2) 「～一流」、「～よろしく」等における「複合語に特有の下位意味」の特徴を考察した。(3) 「食べ放題」などにおける「放題」という表現について、現代日本語における意味と用法、15世紀からの日本語における意味と用法の変化について考察し「放題」は複合語に関わる「文法化」の例と考えられると指摘した。

研究成果の概要 (英文)：In order to refine semantic studies of compound nouns and compound adjectives in Japanese and English, the following have been done. (1) Weakening of semantic elements in compound nouns is shown and a way of the interpretation of such compounds is suggested on the basis of “qualia structure” of Generative Lexicon. (2) Expressions like *Roushi-ichiryuu* and *kabukiyakusha-yoroshiku* are investigated in terms of the notion “compound-specific submeaning.” (3) As to the expression *houdai* in *tabe-houdai*, its use and meaning in contemporary Japanese are discussed and changes of its use and meanings in Japanese since the 15th century are explicated. It is also pointed out that *houdai* can be regarded as an example of “grammaticalization” involved in Japanese compounds.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：語形成、派生形態論、複合語、複合名詞、複合形容詞、意味、意味の稀薄化、意味研究の精密化

1. 研究開始当初の背景

(1) この研究を始めた 2007 年頃は、英語

については複合名詞と複合形容詞についての研究の蓄積 (Jespersen 1942, Marchand 1969, Quirk et al. 1972, Adams 1973, Meys 1975, Bauer 1983, Quirk et al. 1985, Huddleston and Pullum 2002 など) があり、日本語については複合名詞と複合動詞についての研究の蓄積 (野村 1977, Tagashira and Hoff 1986, 影山 1993, 影山・由本 1997, 姫野 1999 など) があつたが、英語と日本語にまたがって複合名詞と複合形容詞の構造と意味については十分精密な形で研究されてはこなかった。(ただしその後 2009 年に由本・影山(2009)などが現われ、特に複合形容詞の意味機能などについて知見がふえた。)

(2) また意味の研究において従来見過ごされていたか、あるいはほとんど扱われていない意味現象がいくつかあつた。それらは、英語の複合名詞や複合形容詞に関して指摘されてきた「副主要語 (subhead)」(竝木 1985, Namiki 1994) と呼ばれるものにかかわっていたり、あるいは通常の複合語特に複合名詞と違って、「主要部」を持ちながら意味的にはその主要部が複合語全体の上位語になるとは厳密には言い難いものに関わっていた。

それらを解明し、複合名詞と複合形容詞の意味研究をより精密なものに推進する必要があつた。

2. 研究の目的

英語と日本語の複合名詞と複合形容詞の構造と意味において従来ほとんど論じられていない側面を明らかにするとともに、それらの意味をより精密なやり方で表示できるようにし、複合名詞と複合形容詞の意味研究を精密化する方向を示すことである。従来ほとんど論じられていない側面というのは「複合語における意味要素の稀薄化」ということとも関連している。

その際、後者の目的を果たすためには Pustejovsky (1995) が提案した「生成形態論 (Generative Lexicon) の考え方が利用できるだろうという見通しがあつた。また前者の目的に関連しては、Namiki (2001) などで提案されていた「複合語に特有の下位意味 (compound-specific submeaning)」という概念も利用できるのではないかという見通しがあつた。

3. 研究の方法

(1) 英語と日本語の文献や新聞雑誌などから複合名詞と複合形容詞の例を集め、その中で通常の例とは異なるものを抽出した。通常の例とは、複合語を構成する 2 つ (以上) の要素のうちで右側に来る要素 (つまり「複合語の主要部」が複合語全体の上位語になるも

のであり、言い換えると複合語全体が右側の要素の下位語 (hyponym) になるものである。

(たとえば sunflower (ヒマワリ) は flower の下位語となり、「柴犬」は「犬」の下位語になる。)

一方、通常の例とは異なるものとは、厳密には複合語全体が右側の要素の下位語にならないものである。たとえば「方向音痴」や「運動音痴」は厳密には「音痴」の一種とは言えないし、「野菜ソムリエ」「タオルソムリエ」、「温泉ソムリエ」は本来の「ワインに関する専門家」である「ソムリエ」の一種とは言えない。同様に英語の star fish (ヒトデ) や jelly fish (クラゲ) も厳密には fish の一種とは言えないし、sea lion (トド) も厳密には lion の一種とは言えないし、water lily (睡蓮) も厳密には lily (ユリ) の一種とは言えないであろう。

(2) これらの例におけるある種の「意味の稀薄化」(つまり「音痴」における「音」という要素がなくなったり、「ソムリエ」の意味における「ワイン」という要素がなくなったりする現象) を、Pustejovsky (1995) の「特質構造 (qualia structure)」の考え方を応用して考察する。Johnston and Busa (1999) が提案した「語彙意味論的表示モデル」を応用して、まず通常の複合語である milk truck (牛乳配達用トラック) のような表現を意味解釈する仕組みについて考察し、その後で

(1) で取り上げた「方向音痴」などの表現の意味解釈の仕方の方向性を示すことを試みた。

(3) 「特有」や「独特」や「固有」などの (形容) 名詞は、単独で使われる場合も複合語の後半に現れる場合も、それらの意味が異なることはない。一方 (形容) 名詞として単独に使われる「一流」や「一筋」などの表現の意味は、「老子一流のアイロニー」や「讃岐婦人一流の心にもない謙遜のポーズ」、「村落史研究一筋の」や「研究開発一筋に」などの複合語の主要部に現れる場合における表現の意味とは異なる。後者の複合語の主要部に現れる場合の「一流」と「一筋」は単独の場合には生じない特有の意味を持つ。これらのような複合語に特有の意味の解釈をどのようにしたらよいかを考える。

(4) 「食べ放題」、「飲み放題」、「言いたい放題」、「やりたい放題」などの表現における「放題」という表現自体の意味は必ずしも明瞭とは言いがたいが、「～放題」という表現は新しいものがいろいろと用いられている。この「放題」という表現の現代日本語における用法について、朝日新聞記事の 1 年分のデータやインターネットにおけるデータを調べて明らかにする。また古い日本語における「放題」の用法について『日本国語大辞典第 2 版』、『時代別国語辞典 室町時代編』、『邦

訳日葡辞書、『芭蕉語彙』などの記述を元にして調査し、その用法や意味の変遷を明らかにする。

さらには「放題」という表現が今日ではまるで接尾辞のように他の表現、とりわけ動詞の連用形の後に多く付加して使われているのはなぜか、また「放題」自体は単語なのか接尾辞なのかという問題などについても考える。

4. 研究成果

(1) 次のような複合語には普通名詞が複合語の主要部に現れているが、複合語全体は、厳密に考えると、それぞれの主要部の下位語になっているとは言いがたい。たとえば「方向音痴」、「運動音痴」、「味覚音痴」、「コンピューター音痴」、「経済オンチ」、「アニメオンチ」、「野菜ソムリエ」、「タオルソムリエ」、「温泉ソムリエ」、「エアポートコンシェルジュ」、「ステーションコンシェルジュ」、「コーヒー茶碗」、「ごはん茶碗」、「ハンカチ王子」、「体操王子」、「介護難民」、「ネットカフェ難民」、「お天気博士」、「お魚博士」などである。

さらには「短歌甲子園」、「俳句甲子園」、「写真甲子園」、「戸越銀座」、「上野銀座」、「津軽富士」、「岩手富士」、「榛名富士」、「東京ディズニーランド」、「香港ディズニーランド」などのような、固有名詞が主要部に現れている複合語もあるが、これらにおいても複合語全体が主要部の下位語になっているとは厳密には言いがたい。

そこでこれらの表現に見られる、第2要素(主要部)における「意味要素の稀薄化」を捉えるのに、「特質構造」の考え方と Johnston and Busa (1999)が提案した「語彙意味論的表示モデル」を応用し、(1)で取り上げた「方向音痴」などの表現の意味解釈の仕方の方向性を示した。

(2) 「老子一流」、「讃岐婦人一流」、「村落史研究一筋」、「研究開発一筋」、「善光寺平」、「佐久平」、「明智平」、「言わずじまい」、「使わずじまい」、「修学旅行生よろしく」、「歌舞伎役者よろしく」などの複合語の下線部は単独で使われる場合と次の2つの点において異なる。①単独の場合と異なる意味で用いられる(たとえば「老子一流」とは「老子独特」とほぼ同じ意味であり、「歌舞伎役者よろしく」は「まるで歌舞伎役者のように」という意味である)。②これらの複合語の間に助詞を入れることはできない(たとえば「??老子に一流」とか「*歌舞伎役者によろしく」という表現は容認可能性が非常に低い)。このような2つの特徴を持つ複合語における通常でない意味をNamiki (2001)に従って「複合語に特有の下位意味(compound-specific submeaning)」と呼ぶことにする。

(3) ①15世紀の日本語においては「放題」

という表現は2つの表記(「ほうだい」と「はうだい」)があり、異なった単語で意味も異なっていた。前者の表記では「あるやり方や順序に任せること。またそのさま。またある人の意志のまま。」(『日本国語大辞典第2版』)という意味であり、後者の表記では「行いなどが常軌を逸していること。自由勝手にふるまうこと。育ちや品位がいやしいこと。またそのさま。」(同上)という意味であった。

その後発音が同じになるとともに異なった2つの意味を持つ1つの単語と理解されるようになった。さらには、およそ19世紀の後半に現在と同じように、「～放題」のような、他の単語の後に付いた形でしか用いられず、接尾辞に類似した用法だけを持つようになった。②「放題」自体は漢語の表現であるが、その前に現れる表現「～」は和語だけに限定されるという特殊な性質を持っている。つまり「～放題」という表現は「混種語(hybrid)」の一種と考えられる。通例語種に関しては同一のものが最も複合しやすいが、もちろん語種が異なる単語同士が複合されることも許される。しかし異なる語種である和語のみに「放題」という漢語表現があえて付加するということは注目し値する。③「放題」自体は基本的に動詞の連用形や「～たい」という希望を表わす助詞に付加する。④「放題」自体は接尾辞とも考えられるが、「～放題」という表現全体は複合語アクセントを持つなどの特徴を考慮すると、むしろ「複合語に特有の下位意味」だけを持つ単語であると考えるのが適切である。④「放題」は複合語に関わる新しい種類の「文法化(grammaticalization)」、つまり単独で現れる語彙的な表現が文法的または機能的な表現へと変化してゆき、最後は接辞のような拘束形態素になっていくような歴史的な過程の例と考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

① 竝木崇康、「複合語の意味解釈における意味要素の稀薄化」、『語彙の意味と文法』、査読有、**2009**、pp. 139-158

② 竝木崇康、「形態論」、『言語学の領域 (I)』、査読有、**2009**、pp. 73-103

〔学会発表〕(計 1件)

① 竝木崇康、「複合語に特有の意味概念—「複合語に特有の下位意味」について—」、国立国語研究所ワークショップ「日本語レキシコンの重要課題」、2010年3月20日、国立国語研究所

〔図書〕（計 1 件）

① 竝木崇康、開拓社、『単語の構造の秘密—
日英語の造語法を探る—』、2009 年、205 ペ
ージ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竝木 崇康 (Takayasu NAMIKI)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：90106740